

なぜ経済予測は間違えるのか デヴィッド・オレル

■ お金は、無限か有限か。

主流派の経済学者は、抽象的な数を使って、お金を制限なく成長し拡大しうるものとして取り扱う。生態経済学者はこれを錯覚と見て、金銭はもっと現実の物理的な富とつながっているべきだと信じている。生態経済学者は、預金で全額裏づけがとれる分しか貸し出せないとする、全準備銀行制に戻ってでも、経済でのクレジットの量を減らすべきだと論じる。

■ ブラックマンデーでの株価指数下落率(29.2%)が起きる確率は、10の45乗分の1？

最初の大きな試金石は、一九八七年一〇月一九日（つまりブラックマンデーで、この日ダウジョーンズ工業株価指数が、不意に二九・二パーセントも下落した。理論によれば、そういうことが起きる確率は、10の後にゼロが四五個続いた数分の一となる——つまり、そんなことはまずありえない。

一九九八年、「長期資本管理」(LTCM) という会社が効率的市場仮説を使って、レバレッジ比率の高い賭けを行なった。基本的には極端な出来事が起きる可能性をないものとして保険を売っていたのだ。ところが、ロシア政府が国債について債務不履行をして、同社は三六億ドルの緊急支援を受けなければならなくなり、経済界の他の部分も破滅させた。理論によれば、こうしたことが起きる可能性は、やはりとてつもなく小さかった。少なくとも、この会社にはマイロン・ショールズのような給料の高い経済界のスーパーヒーローが何人かいたので、可能性は低いはずだった。メリルリンチの社内文書は、用いられたモデルが、「保証されるよりも大きな安心感をもたらすのかもしれない。したがって、このモデルに頼ることは制限すべきだろう」としている。

実は、正統的なリスク評価手法は、この二、三十年の金融危機のどれについても、そのリスクを現実には合う形で評価できていない。一九九七年のアジア通貨危機、二〇〇〇年のドットコム・バブルの崩壊、それからもちろん、二〇〇七年から二〇〇八年にかけての信用収縮などだ。理論としては、観測データによる支持がないらしい。その理由は、この理論が魅力的で使いやすいのが明らかであるのと裏腹に、そこには一つ大きな、すべてにかかわる問題点があるからだ。それは、価格変動が実際には正規分布には従っていないことだ。

■ リスクの形を変えて広がるようにする！

信用収縮の元になる主な因子の1つは、リスクを小分けし、第3者に売り飛ばせるようにする新金融商品（方式とも）の増殖だった。リスク計算の手法は、一般的なものと同じだったが、それは当然のことながら、任に堪えるものではなかった。実は、債務不履行スワップや不動産抵当証券担保債券(CMO)などの新商品は、ソーセージ工場が病気の家畜の肉を細かくして全体に拡散してしまうのと同じ作用をする——リスクをコントロールするのではなく、リスクの形を変えて広がるようにするのだ。さらに、金融当局によってしかるべく規制されない。それこそがこれら商品の魅力の大部分を占めていた。

■ 人間は「冷たく合理的で感情がないもの」？

今日の取引の多くは、コンピュータ化された取引アルゴリズムによって行なわれる。これは気分の揺れや心理的な不安定の影響は受けないと考えられている。ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジでの神経学の研究から、金銭的損失を体験するときの脳の物理的な反応は、恐怖や苦痛によって起こされる反応と同じだということが明らかになっている。株式指標が急落すると、世界中の人々が顎にパンチを食らったようになり、急騰すると、栄養剤の注射を打ってもらったようになる。

そうすると、正統派の経済学理論が個人を冷たく合理的で感情がないものと見ているのはおかしい。

■ 裕福病 affluenza

個人が幸福を求めて競争しているという考え方こそが、まさしく人々を不幸にしているものだ。誰もが自分は裕福ではなく、十分に幸せでないと思ひ込むようになる。幸福を求めて懸命になるほど、それは自分の手から逃げていく。その最終的な結果は、精神疾患にも似たことになる。心理学者のオリヴァー・ジェイムズは、「金銭、所有、外見(肉体的、社会的)、名声」に高い価値を置くことを「裕福病 affluenza」と呼んでいる。

(補足) 裕福病 diseases of affluence [豊かな生活をもたらす病気または健康状態。肥満、高血圧症、糖尿病など。] affluenza 【名】金持ち病◆【略】affluence + influenza